とうにうん

第３０号　１１年６月５日
ＪＲ東海労東二運分会
責任者　庭山義輝
編集　教宣部

節電は駅の照明とN700で

葛西会長は　原発継続で日本経済に活路を

葛西会長の原発に対する考え方が、５月２４日の産経新聞（朝刊）に載っていました。会長が付けた見出しかどうかは分りませんが「原発継続しか活路はない」となっていました。この見出しは、会長の考え方を要約する言葉だと思います。「原発反対」と、矛盾する「電力の安定供給」日本は進退窮まっている、ということのようです。日本の経済が力強く活力に満ちていくためには「電力の安定供給」が必要で、その活路は原発継続だ、という組み立てになるらしい。

そして、原子力利用にはリスクがあり、そのリスクを克服・制御する国民的な覚悟が必要、とも言っています。日常の訓練により十分に習熟しておけば同じ災害に直面しても今回の事態は避けられるとも。これらをしてこなかったのは、敗戦後の日本の悪習が源だとも言っています。何と勝手な言い分でしょうか。

日本の原発は、技術も設計も設備も万全で安全だったはずなのに、想定外の大きさの大地震によって引き起こされたのです。

起きた事故から学ぶのが　教訓

会社は、ＪＲ東海の責任による死亡事故は起きていないと言っていますが、死傷事故を含めて大きな「事故」は起きています。パンタグラフの落下はとても良く分る例としてあります。事故は、どの様な想定をしても、対策を立ても、訓練をしても、発生を完全に防ぐ ことは出来ないのです。事故を発生はせないように特段の注意をはらうことは出来ますが、残念ながら事故が発生してしまいます。

だから、会長も言っているように「同じ災害に直面しても今回の事態は避けられる」ということなのです。事故の 教訓 は同じ事故を繰り返さないためにはとても大切ですが、起きてしまった事故 は防げないのです。残念ながら最初に教訓があるわけではなく「教訓」は事故の後からなのです。

腹を据えてこれまで通り原子力を利用し続ける以外に日本の活路はない、などと言いきらず、進退窮まった日本の経済 のために知恵だしをするべきだと思います。

大胆な発想の転換で活路を

節電について山田社長は、駅などの照明を減らす、省エネの進んだＮ７００系が増えていると言っていますが、もっと大胆な発想してほしいものです。例えば、夏の臨時列車の見直しや、より安全な原発作りのために浜岡原発の耐震工事に資金を出すとか。自然エネルギーで走るリニアの研究をするのも一考だと思います。

会長と社長に　皆で言おう　原発で活路は見いだせないって